



7回生 佐藤一夫 山岳ガイド

昭和26年生まれ、今年12月で63歳になる。職業は山岳ガイド。平成17年53歳でいわき市役所の建築技術職を早期退職。登山ガイド事務所「とうほくトレッキング」を経営している。年に約30企画の（全国・北は北海道から南は九州屋久島、もちろん北アルプスなどの）ガイド登山を実施している。年に約140日山に入山する生活をしている。〈なぜ、



北アルプス薬師岳



穂高岳・涸沢

山岳ガイドに山が好きである。2年間東京の建設会社に勤務し、その後いわき市役所に就職した。そのころからあるきっかけで、登山に目覚め、社会人山岳会に入会した。休日は山歩いたりという生活、結婚してからも同様の生活であった。夏は剣岳の岩登り、冬は飯豊の縦走、春は立山の山スキー。ヒマラヤやモンゴルの海外遠征にも参加した。もちろん、仕事も楽しかった。建築物を自分で設計し、現場で、その建築物が出来上がっていくのを目にするのがうれしかった。それは山に登るのと同じような高揚感があった。しかし、設計・監理に直接関与できなくなって、現場から遠ざかったころから、いつかは山に関係する仕事をしたいと考えるようになった。正直言って、定年退職してからでも遅くはないとも考えていた。しかし、50歳も過ぎる頃から、仕事の関係上、山に入りつづける時間が少なくなってきた。早めの再出発を考えるようになり、早期退職し、ガイド事務所を開設した。最初の2年間くらいは、おもうような仕事が出来ず、退職金で食いつなぐ生活が続いた。しかし、好きで始めた仕事、いろいろなアイデアが浮かんでく

るようになり、その後は順調に仕事ができるようになった。この頃は忙しすぎ、体がもつか心配なほど。〈山は、体と心を健康にする〉「なぜ山に登るのか」の問いに、マロリーは「そこに山があるからだ」と答えたことは有名である。最近の国内の有名な山、特に日本百名山は、年々登山者が増加している。それらは主に、中高年者であり、特に元気なオバサマが多い。また、ここ2~3年山ガールと呼ばれる若い女性グループや、カップルが目立つようになってきた。いずれも（中高年者も）色とりどりの山ファッショントリックを表情も明るい。男性も負けてはいない、退職してから、百名山完登を目指していますと、元気に私のツアーに参加している方も多い。私はそのような方々のために、安全に・そして楽しく・思い出に残る山旅になるよう、工夫したガイド登山を実施している。登山中よく聞くのは、山登りをするようになってから、体調がよくなり、健康になったという話。山歩きは比較的弱い運動（有酸素運動）を長時間するため健康に悪いはずがない。素晴らしい山々の中に身を置くことで、精神的にリラックスし、うつ病も改善された方もおられる。殺伐とした現代社会に生きる私たち、山に登る理由がここにあるような気がする。しかし、山という自然は、やさしい顔を見せており、ただではなく、時には凶暴になることもある。このような場面にこそ、私たち山岳ガイドは、その存在を示さなければならぬ。日々訓練活動に励んでいる、まだまだ自分は若造と思い込んでいる。私の活動は、ホームページ（とうほくトレッキングで検索）でご覧ください。フェースブックでも、情報発信しています。登山に関する質問や、ガイド登山に参加したいなど、気軽にご連絡ください。

Eメール：“hutatuya@eagle.ocn.ne.jp” へどうぞ。



12回生 峯村康三 清水建設勤務

東日本大震災からの復興に関連して

福島第1原発の復旧作業に従事

妻と子供2人 孫3人、あと少しで定年を迎える年齢になりました

現状では福島県内で復興を声高に言う事は出来ないと考えています。私は大震災直後の福島第一原子力発電所1号機カバーリング工事に関わり、その1年後には3号機のカバーリング工事で原発内に行ってまいりました。それから又一年が過ぎましたが平成25年の11月に復興庁から発表された「東日本大震災からの復興の状況に関する報告」では、原子力災害からの復興の項目で

- (1) 避難指示区域の見直しの完了
 - (2) 賠償の状況
 - (3) 除染などの状況
 - (4) 放射線による健康への影響等に対する対策の推進
- にしか触れられていません。

皆が知りたい第一原子力発電所はどんな状況なのかは分かりません。廃炉とする事は決まりましたが、汚染水は？中間貯蔵施設は？避難している方々は戻って来られるのか？など先の見えない事項がそのままでとても復興の話ができる状況ではありません。私が赴任した当時の現地はテレビの映像で目にしたままの風景でした。瓦礫が少し片付いたのかな？程度にしか思えませんでした。現在でも昨年中にやっと4号機での燃料棒取出しが開始されましたが、3号機は今だ取出し用の上屋も未完成であり2号機に至っては手付かずと言って良い状況で、1号機は当初の仮カバーリングのままであります。私の従事した期間はわずかではありました、現地での感想を述べます。

「新人は大変」着任後の第一の閑門は朝の通勤でした。送迎のバスに乗っていれば良いのですが我々のいた時期は、

まずJヴィレッジに到着後皆さんがテレビで目にする様な服装になりその後現地へ向かうのですが、何しろ全体で三千人の従事者の内の大部分が同じ様な時刻に同じ場所で同じ事をする訳なので、何がどこにあるか良く分かっていない新人は一人で通勤出来る様になるまで数日を要しました。現地へ行つても同様な事の繰り返しになります。外部に作業に行く度に着替えが必要だからです。2ヶ月か3ヶ月の期間しか関われないので通勤が一人前になるのに1週間近く掛かってしまうのです。

「自分で考える仕事が出来にくい」自分の作業の目的がなんであるかを理解しているかどうかは重要で有ると思います。JV係員だけでなく職長や作業員までも自分の作業の目的を理解し、考えることで後戻りや不具合などが省けると思いますが、被曝量などを勘案した作業時間の短さや作業員の入れ替わりが頻繁である事などで優秀な方だと思える人が実力を発揮しにくい環境であった。とは言え実際は上職から言われたことをこなせば良いという様な人も見受けられ、自分がなぜ此処にいるかを理解しその作業の目的が何であるかを考え事が疎かになっているので、汚染水漏れなど何故と思われる事象が発生してしまうのだと思います。

【復旧】今だ半ばです



2011年～大震災の鎮魂と明るい気持ちを出そうと言う事で青森のねぶた祭りに参加してきました。ハネ出した瞬間に何分間動けるかと心配しましたが山車の渋滞で結構休憩があり、最後まで続きました。絶対にもう一度行く気持ちを持たせるお祭りでした。

31回生 佐藤則之 いわき市役所勤務

下水道復旧事業について

31回生の佐藤です。私は平成6年に建築科を卒業の後、測量専門学校から地元建設コンサルタントの日栄地質測量設計に就職したのちに平成13年からいわき市役所に入所。水道局、下水道建設課、勿来区画整理事務所を経て現在は小名浜大原にある中部浄化センター内にある下水道管理事務所に異動して4年目となりました。下水道管理事務所は平成22年4月に小名浜・勿来支所内にあった小名浜・勿来下水道分室を統合して新設され、中部処理区「常磐地区及び小名浜地区」、東部処理区「小名浜地区のうち市街地（岡小名、大原地区を除く）」、南部処理区「植田・錦地区」の3地区の公共下水道（汚水）、雨水幹線、都市下水路の維持管理、移設工事、汚水栓の新設工事等を行い平成23年3月11日の東日本大震災が起るまではそれほど忙しくない部署でした。

下水道管渠の被災状況

当時私は下水道工事の立会で6号バイパスを南に走っておりました。車が揺れるので最初は突風で車がゆすられているのかと思いましたが、あまりに左右に揺れが続くので車を路肩に止めて初めてとても大きな地震であることがわかりました。こういったときの維持管理部門は被害状況の確認のため、管轄エリアの調査をする事となっています。職場に戻る際は道路に大きな段差が生じており、下水道にも相当の被害が予想された。特に小名浜の東部処理区は整備から40年以上経過し老朽化が著しく、陶管（陶器の管）の取付管が多数あり、たびたび道路の陥

没が発生していたため大きな被害が予想された。しかし、被災状況調査を進めていくと、どの地区も同様に昔からの市街地部の被災は非常に少なかったことが分かった。のちに分かったのが今回の下水道管渠の被災が液状化によるものがほとんどであったため、田や畑などを埋め立て等で造成したところ（常磐西郷地区・泉玉露地区・植田町根小屋地区・錦町中迎地区）などの被災が多くみられた。被災内容としては、管路埋設箇所の路面沈下、管の閉塞、本管破損、浸入水の発生があり、マンホールの被災としては、隆起、沈下、マンホール軸体ずれ、破損、土砂の流入、汚水の滞水、管接合部の破損が発生した。下水道管理事務所管内において被災した管路延長は中部処理区2541m、東部処理区107m、南部処理区5095m、被災したマンホールは180箇所にのぼった。（国の災害復旧工事採択数量）



泉玉露 液状化による
マンホール付近の沈下↓



管渠の応急復旧

マンホール

マンホールの隆起・周辺陥没に対する対策は、地震発生直後に事故防止のため、カラーコーンや矢印を設置し、その後にマンホールの高さの調整を行った。今のマンホールは2次製品の組み立て型なので一部の部材を抜くなどで、マンホールの嵩下げを行った後、舗装や砂利によるすり付け等の応急工事を行った。

下水道管渠

下水道管渠の破損やたるみが多数あったものの、長期間の断水や原発事故に伴う避難のため汚水の流入が非常に少なくて、すぐに汚水があふれることなかった。その間被災状況の調査と並行して管内滞留・人孔内滞留箇所については吸泥・洗浄を行い閉塞した箇所を解消し、下水の流れの確保を行った。ただ根小屋地区については液状化の影響がひどくマンホールポンプ内に大量の砂が流入したことから、既存のポンプ2台とも動かなくなり、24年の9月まで仮設ポンプ及び仮配管により排水を行っていた。

管渠の災害復旧

下水道管渠

今回の東日本大震災でマンホールの突出や路面異常など埋戻し土の液状化による被害が多くみられたことから、災害復旧工事では新潟中越地震や岩手・宮城内陸地震で実績のあったセメント改良による埋戻土の固化の工法を採用することとなった。これにより今後大きな地震が来ても液状化の可能性は低くなると思っています。現在災害復旧工事は23年度末でほぼ完了し、以後は国の災害復旧工事採択の基準に達しなかった部分の工事を続けていくところです。



↑植田町根小屋
下水管露出状況

※セメント改良工法

- 発生土によるセメント改良土
- 施工管理：現場強度50KPa～100KPaを確保する。
- 固化材標準使用量：30kg/m3 (湿潤重量比3%)
- 現場で試験施工を行い固化材使用量を決定する。